

鹿児島城跡（上山城跡）の調査について

鹿児島市教育委員会 有川孝行

1 上山城跡の位置と環境（第 1・2 図、写真 1～3）

鹿児島市は、九州の南端鹿児島県のほぼ中央部にあり、鹿児島湾（錦江湾）に面し、海を隔てた桜島を含んだ東西約 33 km、南北約 51 km の方向明媚な南九州最大の中核都市である。

上山城跡は、鹿児島市城山町および照国町に位置している。上山城の築かれた城山は、基盤の約 50 万年前に噴出した吉野火砕流堆積物の最上部と考えられる火砕流堆積物、それを覆う約 12.5 万年前に噴出した城山層からなり、その上に約 29,000 前に噴出した入戸火砕流堆積物（シラス）、縄文時代草創期の約 12,800 年前に噴出した桜島薩摩テフラが城山の屋根部から斜面にかけて堆積しており、この頃には現在の城山の原形はできていたことになる。

2 上山城の歴史

上山城跡は、南北朝期に上山氏によって城山の山上に築かれた山城で、上之山城とも呼ばれていた。

暦応 4 年（1341）南朝方であった上山氏が北朝方の島津貞久（5 代当主）に攻略された以降、島津氏の支配するところとなった。応永 35 年（1428）の記録には「上山古城」と記されていることから、すでに廃城となっていたことがうかがえる。天文 8 年（1539）に相州伊作家島津忠良・貴久方の重臣伊集院忠朗が攻略して入城し、戦国島津氏の戦略上重要視されていた。

関ヶ原合戦直後の慶長 6 年（1601）頃に初代藩主島津家久（18 代当主）によって鹿児島城の築城が始まると上山城も改修が施され、当初は本丸・二之丸を配置した山城である上山城と麓の居館を組み合わせた構造で、山城部分に城の中心があった。山城部分である上山城は鹿児島城の防衛面で重要な役割を担っており、慶長 15 年（1610）に初代藩主島津家久は日置家島津常久を城代（城番）として、上山城に住ませ警護に当たらせた。その後、慶長 19 年（1614）に日置家島津常久が死去した後は、新たな城代を置かず番所制を採用して、大手口・新照院口・岩崎口の三口番所に城下士を詰めさせ、引き続き警固していた。

時代が下るにつれて、より政治的な機能が重視されるようになり、藩主の居館と藩庁の機能をもつ麓の居館周辺が整備され、城の中心が移ると本丸・二之丸の呼称もやがて麓の居館を指すようになり、西南戦争時まで記録上から上山城は忘れ去られていくこととなる。

3 調査に至る経緯

鹿児島県の指定史跡である鶴丸城跡（昭和 28 年指定）に平成 24 年から鶴丸城跡御楼門の復元運動が県下の経済界を中心に始まり、平成 27 年に鹿児島県と鹿児島市は、学識経験者等で構成する「鶴丸城御楼門建設協議会専門家委員会」が設置され、専門家・有識者からなる「専門家検討委員会」（以下、検討会議）が発足する。その後の会議で、「鹿児島城跡における遺構の残存状況は良好で、城の価値や遺構の重要性を鑑み、鹿児島城跡の国史跡指定をめざすべきである」との議論が高まり、令和元年の検討会議で、鹿児島県と鹿児島市、県教育委員会と知事部局殿連携が重要であるとの提言がなされ、鹿児島城跡の国史跡指定範囲及び発掘調査箇所についての 3 か年計画が示された。

これを基に鹿児島県と鹿児島市の役割分担を行い、鹿児島城本丸・二之丸を中心とする城山麓の範囲確認は鹿児島県、山城部とされる上山城跡（城山）の範囲確認は鹿児島市が、将来的に史跡指定を目的とした対象地域内における遺構の残存状況と時期、性格等を把握するための確認発掘調査を実施し、国史跡指定に向けた取組みを令和2年から進めることとなった。

4 調査の概括

調査起因	保存目的
調査主体	鹿児島市教育委員会
調査地	鹿児島市城山町248番、248番4
調査期間	令和2年12月1日（火）～令和3年1月29日（金）実働36日 令和3年5月10日（月）～6月9日（水）実働18日
調査面積	（R2）72.75㎡ （R3）16㎡

5 発掘調査状況（第3図）

（1）令和2年度の調査

山城部の二之丸曲輪とされるドン広場（標高100m）平坦面と東西に廻る土塁及び北東隅平坦面、外周を廻る空堀の構築状況を確認することを目的として調査を実施した。調査ではドン広場を馬蹄形に廻る土塁の内側に3ヶ所、北東隅に1ヶ所、土塁北側に掘込まれた空堀内に1ヶ所の合計5ヶ所のトレンチを設けた。

①1 トレンチ（第4図・写真4）

城山公園ドン広場（上山城跡）平坦面から西側を廻る土塁の高さは約8mを測るため、平坦面から高さ2mの範囲内において土塁の内法を確認した。土塁の内法は、地表下70～110cmで確認し、基板の入戸火砕流堆積層（シラス）を切り崩して構築されていることが確認された。平坦面から法尻・内法の構築状況も期待されたが、法尻から平坦面は隣接する水道施設に伴って3m以上の掘削を受けていることが判明した。関連する遺物なし。

②2 トレンチ（第5図・写真5）

城山公園ドン広場平坦面から高さ約3mの土塁は、上端から基底部幅が約1.2mの緩傾斜を呈しており、上端部には明確な平坦面は確認されなかった。土塁の構築状況については、おおよそ3期から構成され、層厚約5～20cmの砂礫混土を版築状に盛って、上部のみを突き固めている。構築時期については、最も古い1期（上端部から基底部高約1m）及び次の2期（上端部から基底部高約2m）の土層からは時期同定に繋がる遺物の出土はないため、時期不詳である。最も新しい3期については、土塁中位の上面（2層）で16世紀後半～17世紀初頭に位置付けられる土師器皿と糸切り痕の土師器皿2点が出土していることから、遅くとも17世紀初頭には現在見ることできる土塁は構築された可能性が考えられる。

③3 トレンチ（第6図・写真6）

表土下位に、非常に硬くしまった2層・3層の整地層を検出した。2層では、水道配管で一部攪乱

を受けているものの、直径約 30 cm を測る柱穴を 1 基検出した。今回は一部の半裁にとどめて完掘は行わなかった。2 層・3 層いずれも硬度 24 mm 以上あり、2 時期にわたり非常に堅緻な整地が行われていることが看取でき、上山城跡若しくは鹿児島城跡に関連する整地層と考えられる。関連する遺物なし。

④ 4 トレンチ (第 7 図・写真 7)

表土下位は、基盤の入戸火砕流堆積物 (シラス) となっており、本来は東西より土塁が廻っていたものと推測されるが、戦後復興期に削平を受けたものと考えられる。関連する遺構・遺物なし。

⑤ 5 トレンチ (第 8 図・写真 8)

城山公園ドン広場外周の土塁と北東側の添曲輪と考えられる平坦面との間に約 7.5 m 幅で掘削された空堀を検出した。南北両壁が人頭大の軽石を多く含み、非常に硬化した入戸火砕流堆積層 (シラス) を急峻に削り出した切岸となっている。空堀の形状については、3 m 以上埋没しており、堀底の検出には至っていないことから、不明である。埋土からは埴瓦片と窯道具が出土した。

(2) 令和 3 年度の調査

本丸曲輪跡の NHK 送信所 (標高 110 m) と二之丸曲輪跡のドン広場 (標高 100 m) の間は谷状の低地 (標高 91 m) で、現在は城山公園駐車場となっており、本来は谷あるいは大空堀であったと推定されていることから、NHK 送信所とドン広場から連なる土塁が途切れる谷状低地部にトレンチ 1 ヶ所を設けて、空堀の存在確認を第一の目的とし、どのような体型のもので、どのような規模のものであるかを第二の目的として調査を実施した。

① 6 トレンチ (第 9 図・写真 9 ~ 12)

NHK 送信所と城山公園ドン広場から連なる土塁が途切れる谷状低地部の現地表面の 2.4 m 下位で堀底面を確認した (空堀 2)。堀底は入戸火砕流堆積層 (シラス) の上部にあたり、本丸曲輪と二之丸曲輪の両曲輪の法面を含めた規模は検出範囲で上端幅 4.4 m、堀底幅 3.55 m、検出面から堀底までの深さ 1.6 ~ 1.87 m を測る。断面形は逆台形状、遺存する堀底から上端部 (北壁) まで 1.87 m 測り、削平を受けて残存する土塁の端部から推定すると本来の深さは 6 m ほどあったと推定される。傾斜角は 北壁で 100 度、南壁で 75 度、上面は城山開発等の造成により大きく削平されている。

空堀 2 の底面中央部において、南壁方向に暗褐色砂質土が充填されて空堀 3 が確認された。上端部が GL - 2.4 m、下端部が GL - 2.8 m を測る。堀底内には深さ 0.13 ~ 0.18 m の溝状遺構 1 条を検出した。検出上端幅 0.24 m、底面幅 0.13 m を測り、東側へ緩く傾斜していることから排水機能を備えた薬研堀であったと考えられる。

6 上山城跡の構造

上山城跡の主要部分は、現在確認できるところで東西 280 m、南北 330 m の間に築かれている。北西側に位置する本丸曲輪山頂部を基準にすると、山麓と本丸曲輪山頂部との比高差は 100 m である。上山城には 17 世紀の絵図史料を参照すると南西から北東に 2 つの曲輪 (本丸、二丸) が表記されているとおり、築かれていたと考えられる。本丸曲輪と二之丸曲輪の間には横堀があり、大手口からの登城道が城内通路としても機能していたとみられる。また、新照院口と二之丸曲輪の境には横堀、帯

曲輪と考えられる削平面などがあり、その間を縫うように横堀が城内通路として機能していたことがうかがえる。城内には3つの口（大手口、新照院口、岩崎口）の番所を通ってのみ入ることができたとされているため、これらの経路解明が上山城の構造を読み解く重要な遺構であるとみられる。

7 上山城跡の発掘調査成果

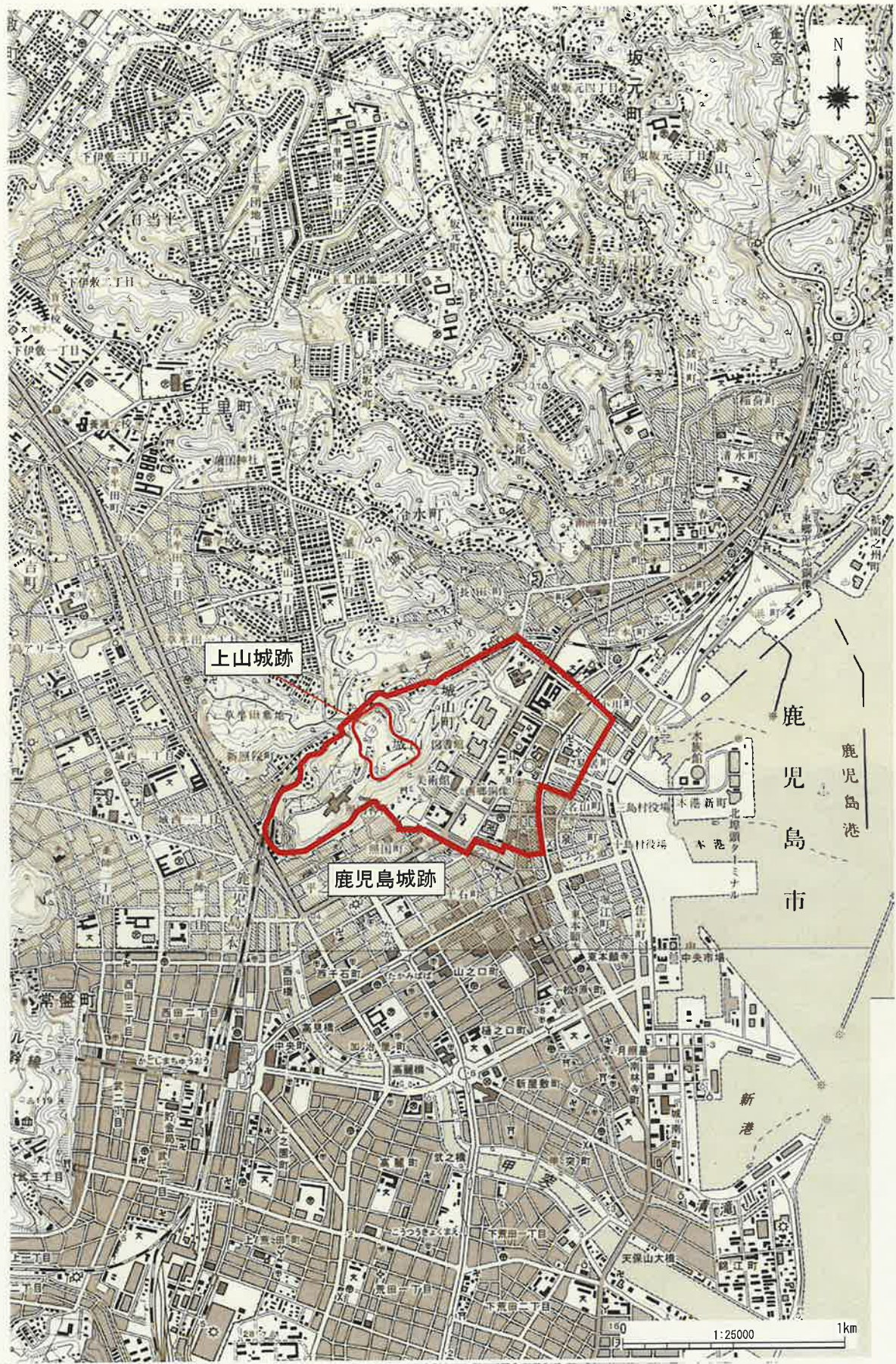
上山城跡の発掘調査は、1986年から2021年の間で3回実施した。発掘調査地点は、二之丸曲輪と考えられる城山公園ドン広場及び周辺部である。ドン広場では平坦面の周囲を廻る西側土塁（高さ約8m）の一部において、内法構造を確認した。東側土塁（高さ約3m）については、断ち割って構築構造を確認した。ドン広場北西部に所在する空堀については、堀の埋没状況と構築状況を確認した。ドン広場の南西端に位置する二之丸曲輪と本丸曲輪の境の空堀については、堀の埋没状況と構築状況を確認した。

出土遺物は各調査地点でわずかに得られたが、上山城の築城期に相当するものは確認されなかった。ドン広場東側土塁の2層上面で、良好な作りを施した土師器皿が出土し、16世紀後半から17世紀初頭の特徴を有することから、文献史料からうかがえる島津家久による鹿児島城（上山城）築城時期と整合的な年代観といえる。慶長19年（1614）に城代の日置島津家の島津常久が死去し、その後の使用状況については不詳であるが、二之丸曲輪北側を廻る空堀1の埋没埋土中から磚瓦片や窯道具として使用される通称センベイが出土しており、出土遺物の年代観から少なくとも18世紀代までは何らかの形で城域を維持していたと捉えることができる。

8 特質すべきことから

上山城を含む鹿児島城は、防御性の高い山城である上山城（城山）と麓の方形居館（屋形）を組み合わせた中世以来の伝統的な構造を踏襲した城である。

上山城は、鹿児島城の山城部として入戸火砕流堆積物であるシラス台地上に築かれ、上部を平坦に整えた曲輪とする一方、傾斜面は垂直方向の急峻に切り立つという特性があり、防御性は非常に高かったことから戦国末期から近世初頭における緊迫した社会情勢への必要性を城郭構造に表した城である。



第1図 鹿児島城跡（上山城跡）位置図



写真2 鹿児島中央駅側から見た鹿児島城跡（上山城跡）遠景（南より）

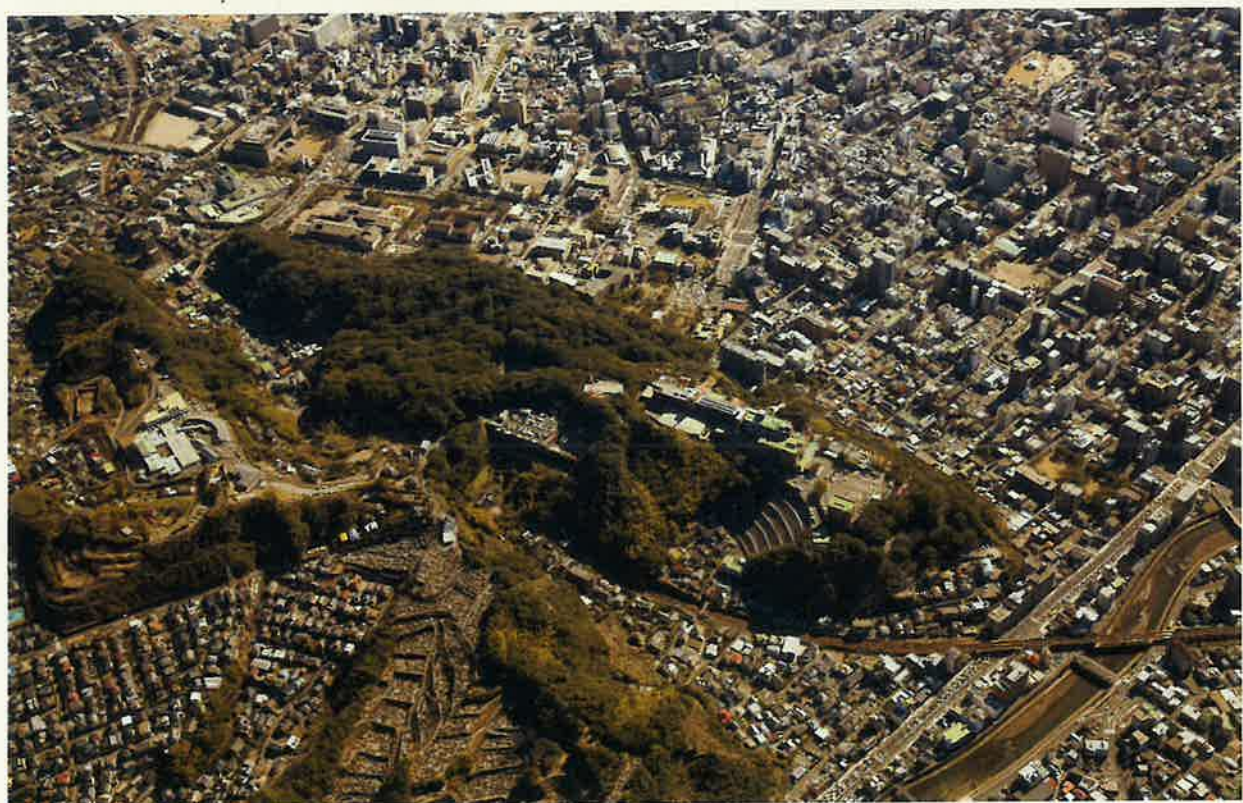
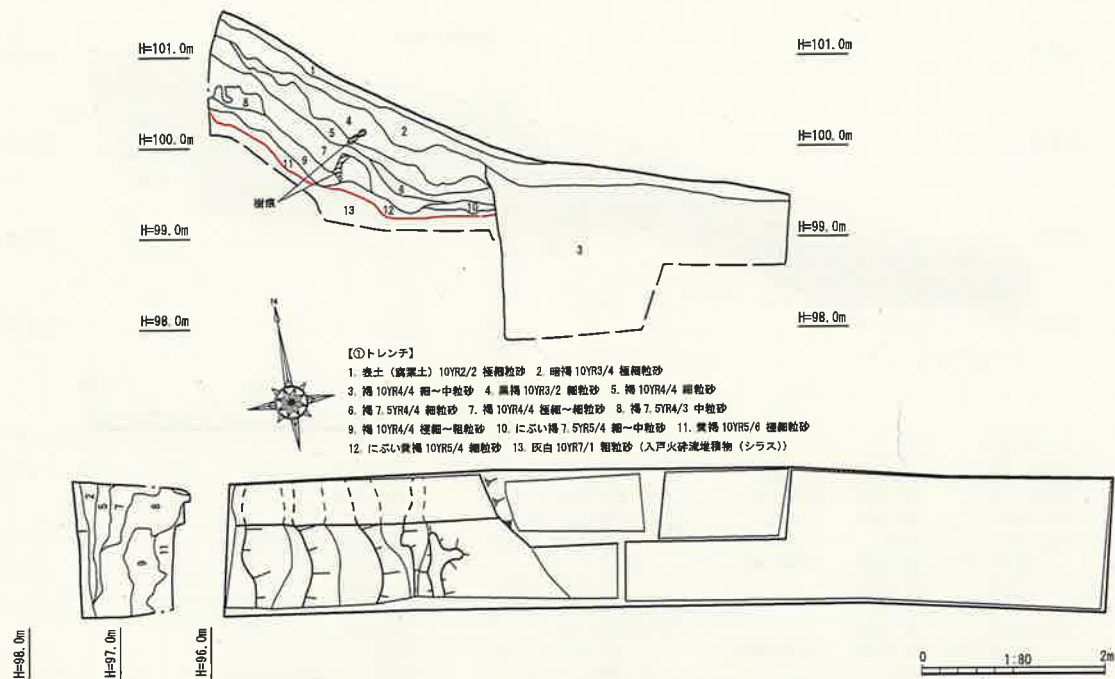


写真3 草牟田墓地側より見た鹿児島城跡（上山城跡）遠景（西より）



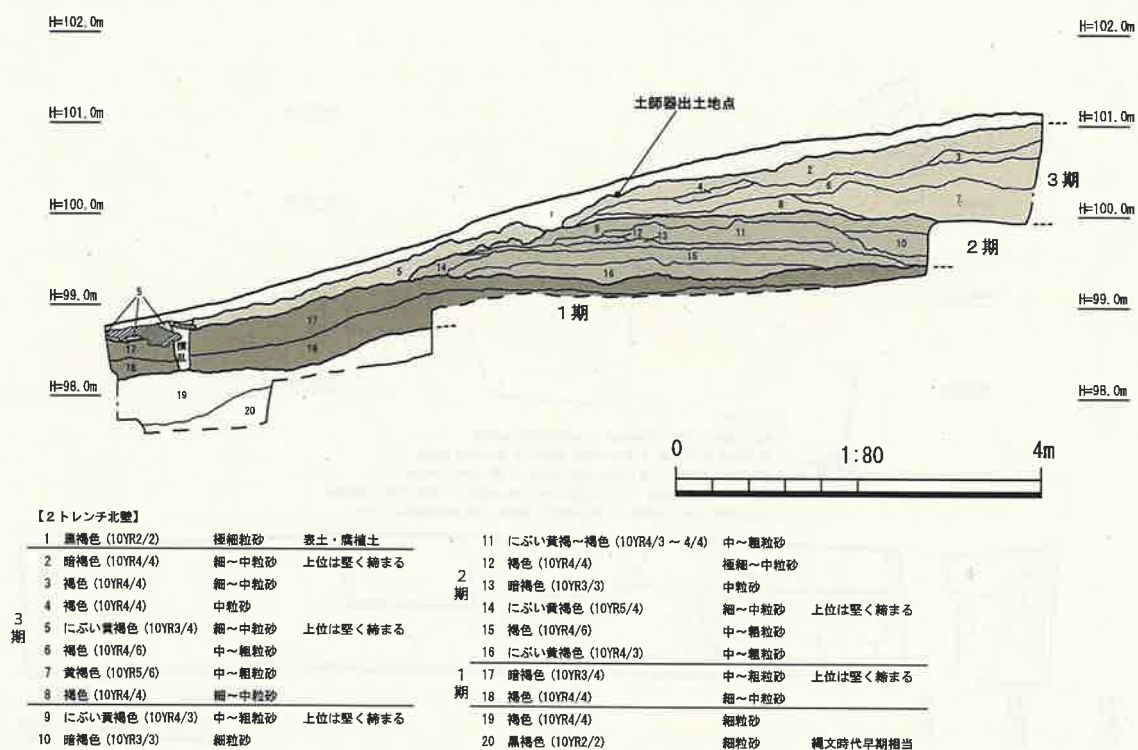
第3図 上山城跡確認発掘調査トレンチ配置図



第4図 1 トレンチ平面図及び土層断面図



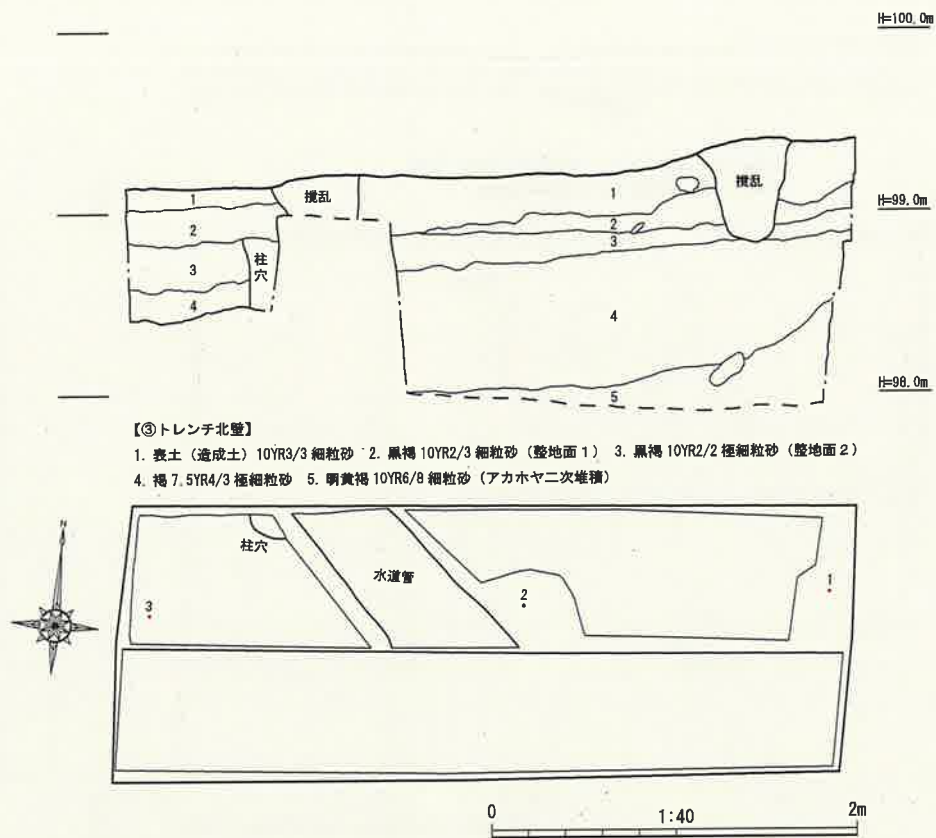
写真4 1 トレンチ土層構築面検出（東より）



第5図 2トレンチ（土壘）土層断面図



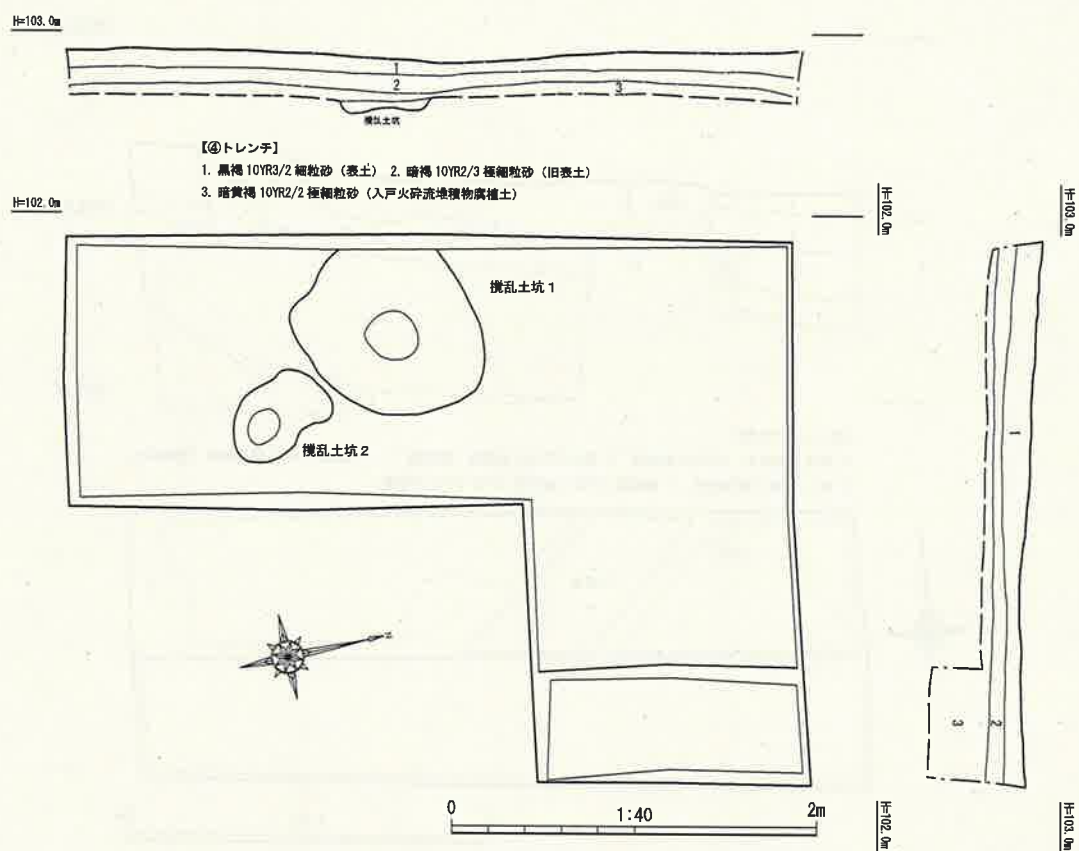
写真5 2トレンチ土壘盛土状況（南西より）



第6図 ③トレンチ平面図及び土層断面図



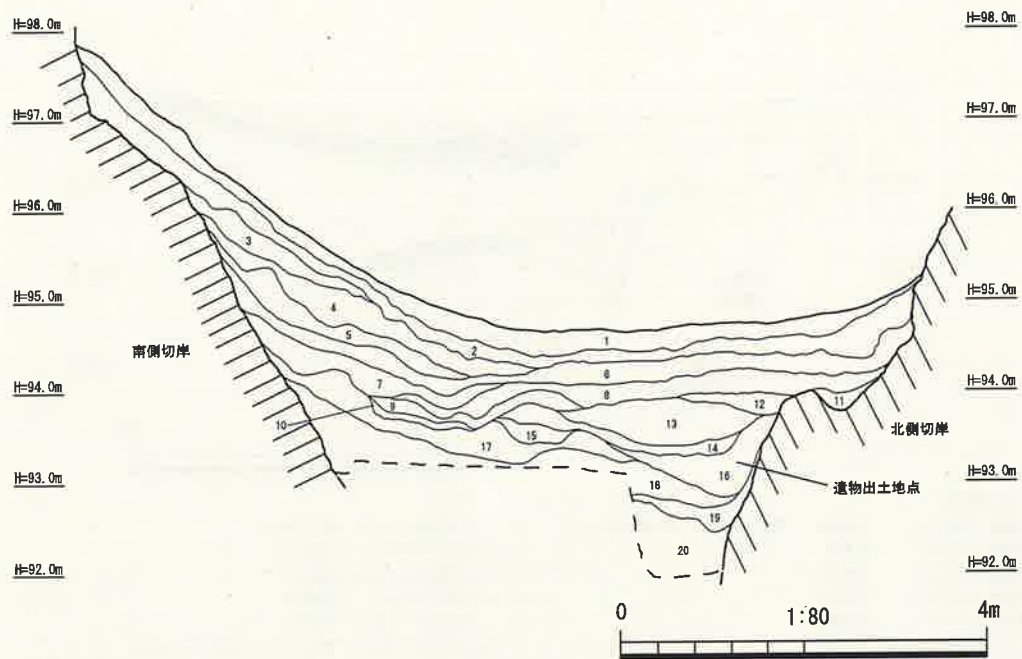
写真6 ③トレンチ柱穴検出状況（南より）



第7図 4 トレンチ平面図及び土層断面図



写真7 4 トレンチ3層検出状況 (北東より)



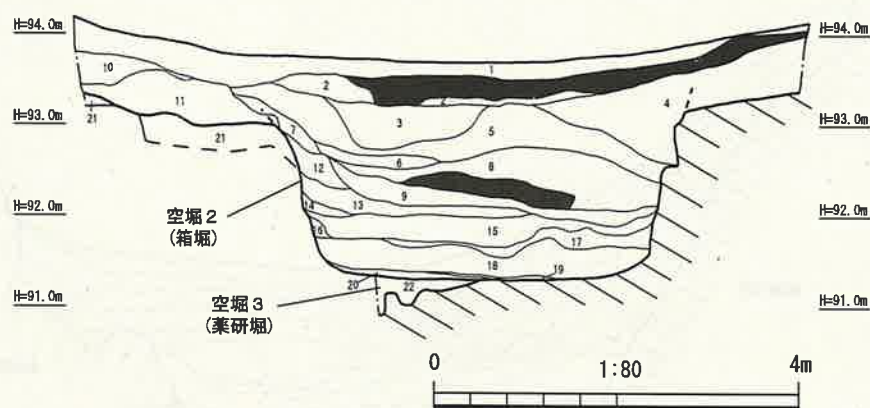
【5トレンチ西壁】

1 黒褐色 (10YR2/2)	極細～細粒砂	表土 (腐葉土)	11 明黄褐色 (10YR6/6)	細～粗粒砂
2 褐色 (10YR3/2)	細～粗粒砂		12 褐色 (10YR4/4)	細～中粒砂
3 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	中～粗粒砂		13 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	極粗粒砂
4 褐色 (10YR4/4)	極粗粒砂		14 暗褐色 (10YR3/4)	細粒砂
5 暗褐色 (10YR3/3)	中～粗粒砂		15 褐色 (10YR4/4)	細～中粒砂
6 褐色 (10YR4/4)	中～粗粒砂		16 暗褐色 (10YR3/4)	細粒砂
7 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粗粒砂～礫		17 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	中～粗粒砂
8 暗褐色 (10YR3/4)	中～粗粒砂		18 にぶい黄褐色 (10YR4/4)	粗～極粗粒砂
9 暗褐色 (10YR3/3)	中～粗粒砂		19 暗褐色 (10YR3/3)	細～中粒砂
10 褐色 (10YR4/4)	中～粗粒砂		20 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粗～極粗粒砂

第8図 5トレンチ（空堀1）土層断面図



写真8 5トレンチ空堀1と切岸検出状況（東より）



【6トレンチ西壁】

1 暗褐色 (10YR2/2)	極細粒砂	表土 (腐葉土) 下部に腐葉土あり	12 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	細～中粒砂	
2 暗褐色 (10YR3/3)	中粒砂		13 灰黄褐色 (10YR4/2)	中粒砂	
3 暗褐色 (10YR3/3)	中粒砂		14 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	中粒砂	
4 暗褐色 (10YR3/4)	中粒砂		15 灰黄褐色 (10YR4/2)	極細粒砂	
5 暗褐色 (10YR3/4)	極細粒砂		16 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	中粒砂	
6 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	中粒砂		17 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	細粒砂	非常に硬く締まる
7 褐色 (10YR4/4)	細粒砂		18 暗褐色 (10YR3/4)	中～粗粒砂	
8 褐色 (10YR4/4)	細～中粒砂		19 暗褐色 (10YR3/3)	中粒砂	非常に硬く締まり、下部に鉄分付着あり
9 褐色 (10YR4/4～4/6)	中粒砂		20 暗褐色 (10YR3/3)	中粒砂	非常に硬く締まる
10 暗褐色 (10YR3/3)	中粒砂		21 暗褐色 (10YR3/4)	細粒砂	空堀3埋土
11 黄褐色 (10YR5/6)	細粒砂	シラス造成土	22 暗褐色 (10YR3/4)	細粒砂	空堀3埋土

第9図 6トレンチ (空堀2・3) 土層断面図



写真9 6トレンチ箱堀 (空堀2) 検出 (東より)



写真10 南壁切岸面検出 (東より)



写真11 北壁切岸面検出 (南より)



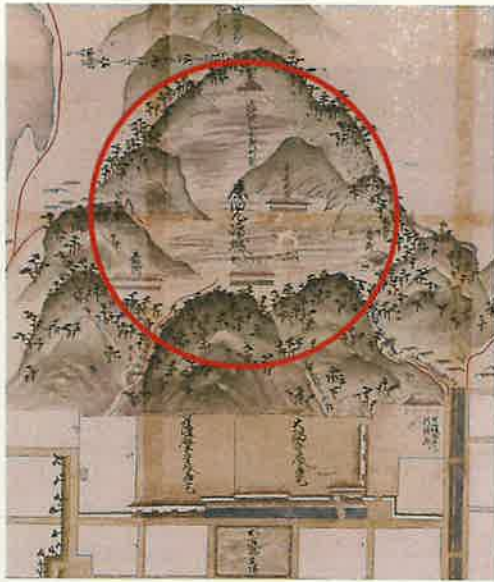
写真12 薬研堀 (空堀3) 検出 (東より)



写真 13 2 トレンチ土壘上面で出土した土師器皿



写真 14 主要出土遺物



寛文10(1670)年「薩藩御城下絵図」(部分)



元禄9(1696)年「鹿児島城絵図控」(部分)



宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図」(部分)



文政5(1822)年「文政五年鹿児島城絵図」(部分)



天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」(部分)



年代不詳「御城山総絵図」(部分)